

堀川三郎著

『町並み保存運動の論理と帰結』

——小樽運河問題の
社会学的分析』



評者：西村 幸夫

本書は、著者の30年以上に及ぶ小樽研究の集大成である。年表や資料を含め500頁を超す大著となっている。小樽運河の保存問題とその後を、関係者へのヒアリングや現地踏査、土地や建物に関する長期にわたる調査によって、小樽運河の保存とはどんな動きであったのか、小樽は何を得て、何を失ったのかに関して、社会学の立場から詳細に分析し、著者の立場からの結論を導いている。

こうした作業を通して、従来の都市社会学が居住一般を対象とするのとはまったく異なる視点で、空間 space ではなく、場所 place の固有性に基づく行動のあり方を考察し、都市社会学に歴史的環境の視点をあらたに導入した労作であるといえる。慶應義塾大学に提出した学位論文がもとになっている。

本書は7章から成っている。

最初の3章は、問題の所在と分析方法を提示し、町並み保存運動そのものの概説を行い、対象都市である小樽の都市史を語るというもので、議論の枠組みを明らかにした章である。

第4章以降が本論である。小樽運河を埋め立てて計画された「道道臨港線」に関して、開発側の論理を追う第4章と保存側の論理を丹念に

拾う第5章とが対になっている。続く第6章では、小樽運河論争が終結した1985年以降を「ポスト運河論争期」として別途扱っている。第7章は全体の結論を提起している。

第4章「変化の論理」では、分量は少ないものの、都市開発がなぜ必要とされるのかに関して、行政側の意見を公平に記録している。

著者の作業でもっとも頁が割かれているのが、保存の論理を扱う第5章である。主要なプレイヤーに対するライフヒストリーを含む詳細なインタビュー（内容を各インフォーマントへ確認している）や会議の議事録などの資料をもとに時代とともに、また人それぞれに保存の論理がどのように組み立てられ、どのように変遷してきているのかを、4つのタイプ（耽美派、純粋保存派、まちづくり派、伝統的左翼運動派）に分けて、詳細に明らかにしている。

第4章と第5章を並列に見て明らかになるのは、都市のそれぞれの部分を機能的な空間 space として見るのか、固有の意味を持つ場所 place として見るのか、というそれぞれの論者の視座の差異である。こうした論考から、place に立脚した社会学を打ち立てるといって著者の立ち位置が次第に明らかになっていく。

第6章では、運河論争によって小樽が全国的に有名になり、その結果観光地化が急速に進む中で、景観が変貌してきている様子が活写されている。皮肉なことに、小樽運河論争で守ろうとしてきた小樽の景観が、観光地化によって内部から変貌しつつあるというのである。著者はその実態を学生とともに毎年実施している小樽運河地区における建物景観調査をもとに実証的に明らかにしている。小樽は有名にはなったものの、その結果「自らが守ろうと闘ってきた景観自体を失っている」(p.367)と厳しく指摘している。

ただ、著者はこのことを必ずしも糾弾してい

るわけではない。小樽のおかれた都市の文脈が変化してきていることを冷静に分析しているのである。これを著者は「終わりの始まり」と表現している。ポスト観光ブーム期を見据えたまちづくりが求められているのである。

一方で、運河地区が観光の「出島化」しているという地元の指摘を取り上げ、実際に運河地区の土地が外部資本に渡っているのかを土地台帳などのデータをもとに調べ上げ、土地は個人所有から法人所有に移行しているものの、地元企業の手にとどまっていることを実証的に明らかにしている。(ただし、外部資本に貸し出されている現実はあるかもしれないが、そのことには触れられていない。)

結論を提示する第7章には「保存とは変化することである」という刺激的なタイトルがつけられている。これはややミスリーディングな題だが、どんな変化でもいいというわけではなく、住み手がマネジメントできる社会的な範囲内に変化を収めるという意味での変化である。これを評者はmanageable changeと呼んでいるが、これと同趣旨の表現だと思う。

ここにも場所に主体的にコミットする住民の姿が前提として想定されている。つまり、保存運動というものが運河や倉庫群を残すことそのものではなく、運河や倉庫群とともにある地域生活のあり方を残すことにあるとするならば、その線に沿った変化は当然受容されるべきものだという主張である。これは長年、歴史的環境の保全問題を都市計画の立場から受け止めてきた評者の所感とも重なるものである。

つまり、都市の個性を活かした計画を進めるためには、歴史的環境の保全は可能な限り進める必要のある施策であり、その点では評者の立場は、都市計画全般の中ではかつてはかなりの少数派ではあったものの、はっきりしていた。

社会学者のように対象を外から客観視するということはできないのである。

しかし、そのことから、社会学者と接するときは(堀川先生は別だが)、対象とする都市との距離感の違いから、なんとはなしに居心地がよくないのである。評者自身がインタビューをされているような印象を受けてしまうのだ。また、対象に近づきすぎて、学問的ではないと批判されたこともあった。

これは学問の性格の違いだといえるだろう。

本書にたびたび登場する「北大三人組」というのは、私と同世代の都市計画の(当時は)若き学究で、峯山富美さんが「小樽運河を守る会」の会長時代に保存運動の論理的支柱となって大活躍したメンバーであるが、評者にとっては大学院生時代からよく知る仲間であり、小樽という現場で活躍するまぶしい存在であった。

評者にはたとえば「北大三人組」を客観視して論述することは不可能であるし、そうした姿勢を取りたいとも思わない。学問の立ち位置が違うのである。そもそも都市計画は、はじめから都市環境の改善といったようなミッションを持っており、そこへ到達する道筋を考える計画技術であり、地域へのコミットメントが不可欠である。社会学者から見ると、あるいは学問ともいえないのかもしれない。

しかし、そうした(学問ともいえないかもしれない)計画技術の側からすると、著者が大著の末にたどり着いた社会的変化を伴った保存という結論(評者の用語ではこれこそ「保全」であるが)は、当初から当たり前のことでもあった。都市生活は変化するので、その器である場所も変化せざるを得ないのである。問題はいい変化とよくない変化を判断して区別する仕組みをいかにそれぞれの地域が持つことができるかにかかっている。

厳密な(そしてある意味もどかしい)検証作

業の末に、当たり前結論に到達したという印象を持ってしまうのは、都市計画者の独断なのだろうか。ただし、これだけ長期間にわたって現場にかかわり続けた著者の目による洞察が、都市計画の現場の人間の感覚と一致するということは、評者にとっても根拠の乏しい信念のようなものにひとつの客観的かつ論理的な支柱を与えられたようで大変ありがたい。

また、第6章において、ポスト運河論争期の小樽の景観変貌を詳細に観察してきた著者の実証的議論はショッキングで、かつ説得力に富んでいる。観光による地域経済の活性化が歴史的環境保全の有力な論拠のひとつであることは否定できないが、地域のコモディフィケーション化が地域のアイデンティティさえも危うくするような事態を招くということを具体的に提示されて、都市計画を専門とするものとして対応策の必要性を痛感する。ただ、現状をひろく理解するためには運河周辺だけでなく、小樽全体の変化を見る必要があるだろう。これはもはや

都市計画の課題である。とりわけ歴史的環境の保全を中心とした都市計画を唱道してきた評者にとって、重い課題である。

さらに加えると、第5章に掲載された数多くの貴重なインタビューは、評者にとっても目を見開かされるものが多く、とても参考になる。こうした検証された生の声の奥深さこそが、著者をして30年以上も小樽通いを続ける原動力になったであろうことは容易に想像できる。そこにこそ社会学者の心情を読み取ることができる。

対象との距離感は異なるものの、対象とずっと付き合っていく覚悟そのものは共有できるように思う。そしてこの覚悟こそ、本書に説得力を持たせ、魅力的にしている最大の宝なのではないだろうか。

(堀川三郎著『町並み保存運動の論理と帰結—小樽運河問題の社会的分析』東京大学出版会、2018年2月、xii+504頁、定価8,000円+税)

(にしむら・ゆきお 神戸芸術工科大学教授)